

平成25年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT25141

【プログラム名】 介助犬・聴導犬と共にリハビリお助け隊
～障害適応の作業療法プログラム研究～



開催日：平成25年8月3日(土):中学生
平成25年8月4日(日):高校生
実施機関：愛知医療学院短期大学
(実施場所) (城北キャンパス・講堂)
実施代表者：原 和子
(所属・職名) (愛知医療学院短期大学・教授)
受講生：中学生:28名
高校生:23名
関連URL：<http://yuai.blog.so-net.ne.jp/2013-08-10-1>

【実施内容】

開講式の後、科研費概要と今回のテーマの基となった研究「介助犬の適応に関する作業療法的研究 (平成15年度科学研究費補助犬基盤研究B, 2)、研究代表者 原 和子」の説明をした。次に今回のテーマであるリハビリテーション医学における補助犬(介助犬、聴導犬、盲導犬)の役割りについて学ぶために、PBL(ProblemBasedLearning:問題解決型学習)チュートリアル形式の説明をした。一般のPBLでは、小グループごとに事例提示、課題確認、論点と仮説検証、中間発表、自己学習、グループ討議、最終発表という段階をとるが、今回は時間の関係で、まず補助犬三種(介助犬、聴導犬、盲導犬)のデモと講義を行い、次にグループ討議、発表と続けるハイブリッドPBL方式とした。グループ討議では事例と課題確認から直ぐに討議し、まとめてもらうために、論点、資料等は事例シナリオ(別紙)にできるだけ提示した。事例シナリオは、中学生用に「脊髄損傷による対まひ(男性、15歳)」とし、研究課題は「介助犬はロボットとどこが違う?」であった。高校生用には、事例シナリオとして「生後一歳時ワクチン接種後の聴覚障害(女性、65歳)」とし、研究課題は「聴導犬とともに!～リハビリプログラムを考える～」であった。各グループには作業療法士教員のチューターが付き、事例の理解から問題解決策までを支援した。グループの全員が参加できるように、司会者、書記(複数名)、発表者(補助者あり)の役割りを事前に決めた。

補助犬のデモでは、本事業申請時、聴導犬と介助犬のデモのみ確認できていたが、その後、中部盲導犬協会の協力も得て、補助犬全種のデモが可能となった。デモでは、参加した中学生、高校生の希望者が体験できた。その後のグループ討議の間でも、補助犬が待機し、参加者が希望する個別の動作を常時体験できた。二日間、参加した補助犬は介助犬(候補犬)一頭、多目的補助犬(介助犬と聴導犬、PR犬)一頭、聴導犬五頭(内、PR犬四頭)、盲導犬一頭であった。結果、多くの参加者が補助犬と実際に触れあうことができた。

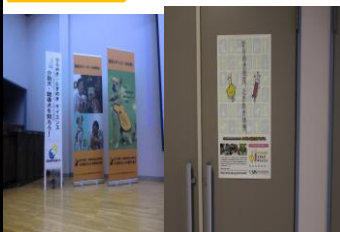
当日のスケジュール ・ *実施の様子*

受付 10:00～

開講 10:30～

講義/デモ
「介助犬・聴導犬・盲導犬」 11:00～

昼食 12:00～



受付：グループ分け/資料配布。
開講式：科研費の話/オリエンテーション。
グループにて役割分担/自己紹介。

補助犬と作業療法
補助犬(介助犬・聴導犬・盲導犬)のデモンストレーション。

視覚障害体験ということで目隠しをしながらランチタイム。
目が見えることの大切さを感じてくれていました。

実習 13:00～



体験タイム：受講者が補助犬の役割（睡眠から起こす）他を体験しました。

グループワー 14:00～



補助犬を連れて、各グループを回り、質問に答えました。

ティータイム 14:40～



ティータイム中もグループワークが継続していました。

発表準備 15:00～



グループの意見をまとめ中。

発表 15:20～



全員に聞こえるように、グループでまとめたことを発表しました。

総括 15:45～



研究代表者、チューターの他、日本聴導犬協会会長をはじめ、引率参加していた高校の校長、先生方、父兄の方からも、コメントをいただきました。

未来博士号授与 16:00～16:30



未来が子ども達の希望に忠実でありますように！

記念撮



補助犬と一緒に！「はい、ポーズ」
また、会いましょう！

事務局との協力体制

週一回の会議を持ち、諸活動の進捗確認と情報の共有をした。事前には広報活動、必要な物品の確認と不足分の購入、当日の昼食・ティータイムの内容決定と購入、会場設営、駅および道路からの案内掲示、参加者の名札作りなどの協力を得た。開催日前後には、受付、資料配布、机、椅子などの移動、プロジェクター類の準備、写真撮影、昼食・ティータイムの諸準備と片付け、報道機関（中日新聞、中京テレビ、クローバーテレビ）および引率者（高校の校長、先生、保護者）の対応などの協力を得た。開催後は、報道機関の内容記録、アンケートなどのまとめ等の協力を得た。

広報活動

近隣の施設・お店にポスター、中学校、高等学校に資料を配布・FAX、中学校には1～3年生に1枚ずつ配布した。また、新聞折込チラシ・新聞掲載・フリーペーパーにて参加者募集に努めた。

安全配慮

参加者全員が傷害保険に加入した。
真夏日での開催であったため、熱中症に注意し水分は何時でも飲んで良いこととし、休憩もグループワーク中、適宜自由にとってよいこととした。救急セット類は常備した。

今後の発展性、課題

日本での補助犬の普及は、欧米に比べて著しく遅れている。その理由は多様であるが、ひとつの理由として、リハビリテーション医学における作業療法士との連携が不十分であることが挙げられる。作業療法士は障害者の福祉用具や環境設定に関わることから、物理的な観点に加えて、心理・社会的な面からも補助犬を障害者の生活や仕事の上でのパートナーとして生かすことができる。補助犬の中でも、盲導犬のみ道路交通法により規制されているため「歩くこと」だけを法令で保障しているという問題を抱えている。高齢化社会の中で、中途失明者は増えており、社会参加のための盲導犬の役割りは介助犬（落としたものを拾う、人を呼びに行く、スイッチを押すなど）的役割まで拡大すべきである。こうした発展性、課題は次代を担う子ども達に託されており、今回のプログラムを通じて、後世に希望を託すことができる。課題として、中学生用プログラム「介助犬はロボットとどこが違う？」では、「犬よりもロボットの方が良い」、「死なないので良い」などの意見が若干名あった。これらは中学生のロボット発展への期待、夢が込められていて楽しみであるが、原点として補助犬の存在があってのことであり、今後の補助犬の普及、活躍もロボット開発に刺激を与える存在として切磋琢磨、発展が望まれる。また、現補助犬法では、「原則として18歳以上がユーザーとなれる」とあるが、今回参加した中学生、高校生は補助犬の理解も良く、体験希望では積極的に手をあげて参加でき、問題となっている毎日の世話やしつけも可能ではないかと思われた。今後の普及について、中学生、高校生のユーザーの可能性について肯定的に考える機会となった。

【実施分担者】

原 和子	作業療法学専攻・教授
加藤 真夕美	作業療法学専攻・講師
横山 剛	作業療法学専攻・助教
山下 英美	作業療法学専攻・助教
岡田 智子	作業療法学専攻・助教
堀部 恭代	作業療法学専攻・助教

【実施協力者】 8名

【事務担当者】 田原 靖子 教育研究推進課・課長